

XI 調査の成果と課題 II

1. 平安時代の出土土器について

はじめに

新屋敷遺跡D区（以下、D区とする）における平安時代の遺構は、69軒の竪穴住居跡と3基の井戸が検出された。新屋敷遺跡全体では100軒以上の竪穴住居跡と4基の井戸を含む平安時代の集落が存在したことが明らかになった。D区で検出された住居跡や井戸は出土した土器群から、概ね9世紀後半から10世紀後半にかけて営まれたものと推定される。集落の変遷は土器群の年代から以下のⅠ～Ⅳ期に分類することができる。ここでは各期における土器群の特色と、時期を経るごとに中心的な土器となる酸化焰焼成の土器について記してみたい。

（1） 出土土器の年代

第Ⅰ期（第488図）

9世紀中頃から後半にかけて構築されたものである。S J 51・53・61・63・71・76・78・103・S E 94・121などが該当するものと考えられる。遺構の分布は比較的遺跡の西側を中心とした地域を主体にしている。基本的に住居間の距離もある程度保たれ、重複関係は生じていない。出土土器には須恵器坏・埴・高台付埴・皿・蓋・長頸瓶・広口壺・甕、土師器坏・埴・台付甕・甕、灰釉埴・皿、酸化焰焼成坏などがある。

須恵器類は出土土器の約70%を占めている。坏は口縁部先端が外反し、体部が張り、底部は回転糸切りするものが主体である。中にはS J 76-1のように、底部を厚くつくるものもみられる。埴は体部が張り、口縁部は緩く外反しながら、ひらくものが主体である。高台付埴は量的には埴より少なく、この段階に出現してくるものとみられる。口径は埴と比較しても大差なく、高台が角高台である。また、埴のS J 78-7にみられるようにロクロ目が強い。皿は量的には少ない。口縁部は大きく外反し、底部、口径に対する器高の比率が小

さい。蓋は破片が多く、つまみは殆ど出土していない。

長頸瓶・広口壺は口縁部の破片が多い。相対的な量は不明であるが、図示しなかった小破片も含めて2軒に1個体程度の割合で出土している。甕は胴部の破片が多く、外面は平行叩きである。

須恵器は一部不明なものもあるが、すべて南比企産と考えられる。

土師器は坏を含む住居が一部存在するが、相対的には少ない。体部から口縁部にかけては横ナデで、体部中央には指による押さえが顕著である。底部はいずれも手持ちヘラケズリである。土師器の組み合わせの中心は、台付甕と甕である。ともに口縁部はいわゆる「コ」の字口縁である。甕類の胴部調整は底部から最大径をもつ胴部上半まで縦ヘラケズリするものが多い。また、小型甕も少量ではあるが、含まれる。埴は内面が黒色処理され、横及び斜めのミガキが入る。時期的には稀で、混入品の可能性も考えられる。

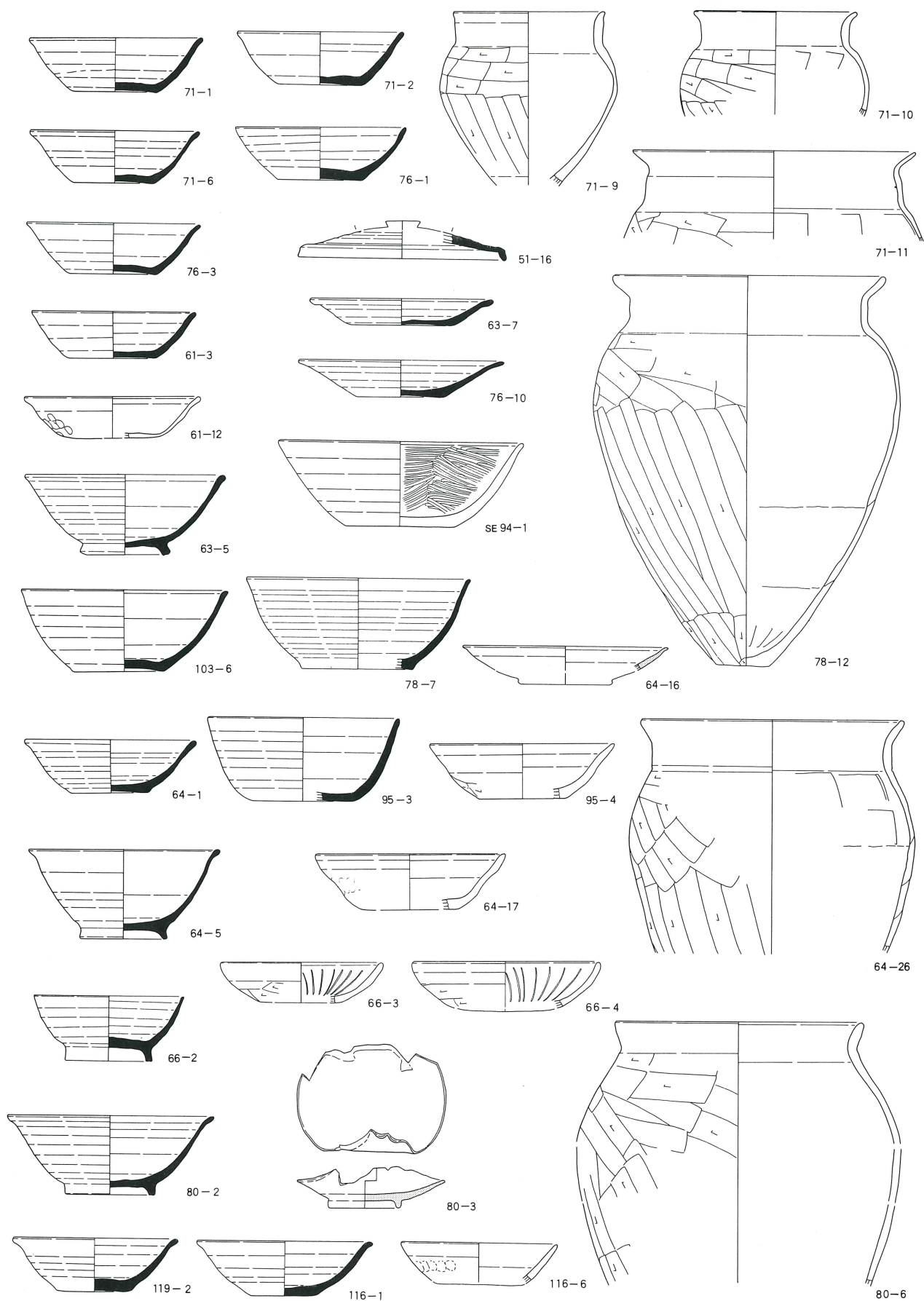
灰釉陶器は少なく、皿が数点小破片が出土したにすぎない。S J 64-16は刷毛塗りで、二川産または宮口産と考えられる。

第Ⅱ期（第488図）

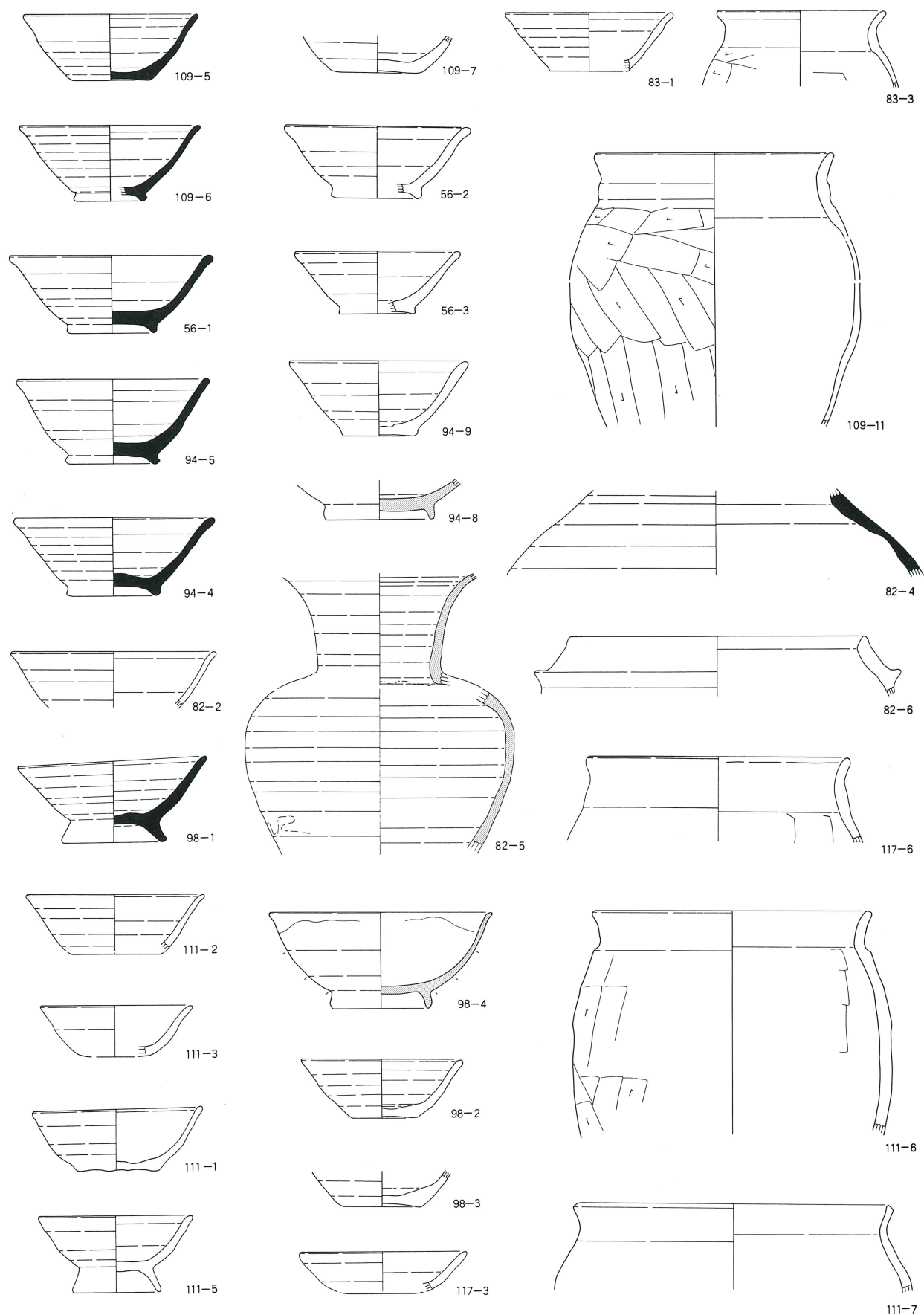
9世紀後半から末頃に構築された住居群である。S J 64・66・80・95・116・119・S E 87などが該当する。第Ⅰ期の住居群との重複もみられるようになり、土器群にも酸化焰焼成の坏などが混じるようになってきている。また、須恵器では高台付埴と坏が次第に増加する傾向が窺われる。土器の種類は第Ⅰ期とほぼ同じであるが、稀ではあるが、灰釉の耳皿なども含まれる。

須恵器は量的に第Ⅰ期と同規模で推移するが、器種の比率に変化がみられる。埴は殆どみられなくなり、高台付埴または高台付坏が増加する。坏は底径の縮小化が始まり、口径との比率が大きくなり、S J 116-1、

第488図 土器編年図(1)



第489図 土器編年図(2)



119-2などのような形態の土器群が主体となっている。高台付埴は多様で、大小及び深身がある。高台は角高台と「ハ」の字高台が主体である。

土師器は量的にはやや増加傾向にある。特に埴は絶対量はそれほどでもないが、種類の多様化がみられる。S J 66-3・4のように内面に暗文を施すもの、S J 116-6のように小型化するものなどがある。しかし、この段階以降はいわゆる土師器埴は殆どみられなくなり、酸化焰焼成の埴類が主体となってくる。甕類は「コ」の字口縁のものからやや崩れたものあるいは口縁部の短い「く」の字口縁への過渡期と考えられる。「コ」の字口縁の甕は、最大径が胴部上半部でもやや下がった位置に設けられるものが多く、S J 80-6のような甕でも同じような傾向がある。台付甕は甕と同じような口縁部の変化がみられ、出土量をみると減少傾向にある。

酸化焰焼成の土器類は、少なくともこの段階には出現するものと考えられる。基本的にはロクロを用い、底部は回転糸切りである。中にはS J 95-4のように底部を手持ちヘラケズリするものもみられる。

第Ⅲ期（第489図）

9世紀末頃から10世紀前半にかけての住居群と考えられる。S J 56・82・83・94・98・109・117などが該当する。集落の規模は第Ⅰ・Ⅱ期と大きく変わらないが、遺跡の北東側に中心が移行する傾向が窺われる。土器群の構成は9世紀代に比較して、構成上の変化が著しい。特に第Ⅱ期に出現した酸化焰焼成の土器群の占める比率が高くなっている。また、須恵器の生産地は、第Ⅱ期までは南比企産の占有率が極めて高かったが、10世紀頃に入り末野産などの新たな生産地も製品の供給圏として加わっている。

土師器は甕類の器厚化が進み、後には羽釜も出現する。灰釉陶器は椀・皿類が中心であるが、稀に瓶類もみられる。生産元は二川・宮口という東海西部産から清ヶ谷、旗指という東遠江産、東濃産に拠点に移り、量的にも増加している。

須恵器埴は焼成の粗悪な製品が多くなり、無台と有

台（高台付埴または埴）の占有率も逆転する。また、高台付埴と埴の区別が不明瞭で、規格の画一化が進行してきたことを示している。有台の埴は末野産や南比企地域以外で生産されたものが多い。甕類は少ないが、依然として南比企産が主体で、他の地域からの供給はみられない。

土師器は甕が主体で、台付甕は殆ど姿を消している。甕は口縁部が「コ」の字の名残をとどめるものの、最大径は胴部中央になり、口縁部は短く、器厚化する。

酸化焰焼成の土器、特に埴類の増加が目立つ。埴は無台と有台があり、S J 56-1と56-2のように、有台は須恵器のそれに形態が類似する。灰釉陶器はS J 82-5のように強く釉を出すものとS J 98-4のように浸けかけではあるが、無釉に近いものもみられる。

第Ⅳ期（第489図）

10世紀後半以降の住居群と考えられる。遺跡の北側に小単位で構成されている。S J 111・117などが該当する。土器群の中心は酸化焰焼成の土器で、須恵器は殆ど姿を消している。土器群は埴類と甕類で構成され、胎土からみると、生産地は複数存在するようであり、須恵器以上に流通の仕組みが多極化していることを窺わせる。

酸化焰焼成の土器群は、第Ⅱ期・Ⅲ期と同様埴類で構成されている。S J 111を例にとると、1～3は（破片実測の影響も多少あるが）いずれも形態や大きさが異なる。2は底部を欠くが、1・3は回転糸切りである。5は「足高高台」をもつ高台付埴で、胎土は3と共通である。胎土には県内の土器には稀な雲母が含まれている。1・2はやや器厚が不足するが、形態的には第Ⅲ期の土器群の延長線上に位置づけられるものと考えられる。しかし、胎土においては1と2は異なっている。以上のことから、この住居の埴類は、少なくとも三つの異なる生産地から製品が購入されていることが窺われる。また、S J 117-3のように小型の浅い埴もみられる。

甕類はいずれも口縁部が短く、口縁部以外は器厚化

している。S J 111-6の甕は、いわゆる「土釜」と呼ぶもので、群馬県内などで多くみられる。胎土はS J 111-3・5の坏と共通で、雲母を多く含むものである。

(2) 酸化焰焼成の土器群

新屋敷遺跡D区では、須恵器・土師器とともに酸化焰焼成された土器群が検出された。土器群はいずれも住居跡から出土したもので、焼成遺構などに伴うものはなかった。これらの土器群には、以下のような特徴がみられる。

1.色調は橙褐色または淡赤褐色で、中には土師器に類似するものもある。2.胎土は肌理の細かいものと粗いものがある。概ね前者の色調は淡赤褐色、後者は橙褐色で、砂を多く含んでいる。3.成形・調整は基本的にロクロを使用し、底部は回転糸切りである。4.9世紀後半には出現している。

今回取り上げた土器群は、いわゆる「ロクロ土師器」として紹介されてきたものである。その呼称については、従前より論議されてきたが、「土師質土器」との明確な区別をつけにくいのも現状である。しかし、この十余年の間に資料も増加し、適切な用語への統一が望まれるところである。本稿では敢えて「ロクロ土師器」という名称を使用せず、酸化焰焼成の土器という表現を用いることとする。また、ここでは新屋敷遺跡と同時期の蓮田市椿山遺跡との比較を通して、第Ⅰ～Ⅳ期の中で酸化焰焼成の土器群の変遷について考えてみたい。

「ロクロ土師器」は少なくとも8世紀前半には成立したものと考えられているが、成立時期については地域によって状況が異なるため、一律とはいえない。新

屋敷遺跡では集落の始まりが9世紀中頃と考えられる(なお、古墳の周溝には8世紀代の須恵器も含まれており、周辺には奈良時代の集落が存在する可能性も十分考えられる)、当初は供膳器の組成は須恵器坏が中心で、僅かに土師器坏はみられるものの、酸化焰焼成の土器群はまだ出現していない。酸化焰焼成の土器群が出現するのはやや遅れ、9世紀の第3四半期から第4四半期にかけてで、第Ⅰ～Ⅱ期に該当する。土器群といっても当初は坏だけで、皿などの器種は出現していない。坏は供伴する須恵器坏とほぼ同じ法量で、形態は口縁部が須恵器に比べて開き気味であることを除けば、類似しているといつて良い。体部はロクロ成形の後、ヘラケズリを行っている(第490図13)。小破片などを含めても灰釉陶器などと量的には同じで、副次的に入ってきたものとみられる。椿山遺跡でも同様な傾向がみられた。供伴遺物では須恵器碗の法量の縮小化・減少化が目立ち、土師器は「コ」の字口縁の甕が次第に衰退し、肩の張りが弱くなる段階である。

第Ⅱ期になっても量的な増加は余りみられない。やはり副次的に流通する程度の動きと考えられる。形態は須恵器に類似するが、やや小振りになり、口縁部は直線的にひらく傾向がある。椿山遺跡では新屋敷遺跡に比べてやや多いようであるが、供伴遺物の土師器甕などには「コ」の字口縁から口縁部の短いものへの過渡期の様相が窺え、須恵器では常陸・新治産の坏や甕類も入る。第Ⅲ期は第Ⅱ期とは様相が異なり、量的な優位は須恵器に譲るものの、住居によっては逆転している場合もみられる。形態的には高台付碗の登場や坏にも大きさの違いなどで、種類の増加がおこなわれている。椿山遺跡では須恵器では焼成の劣化したものや

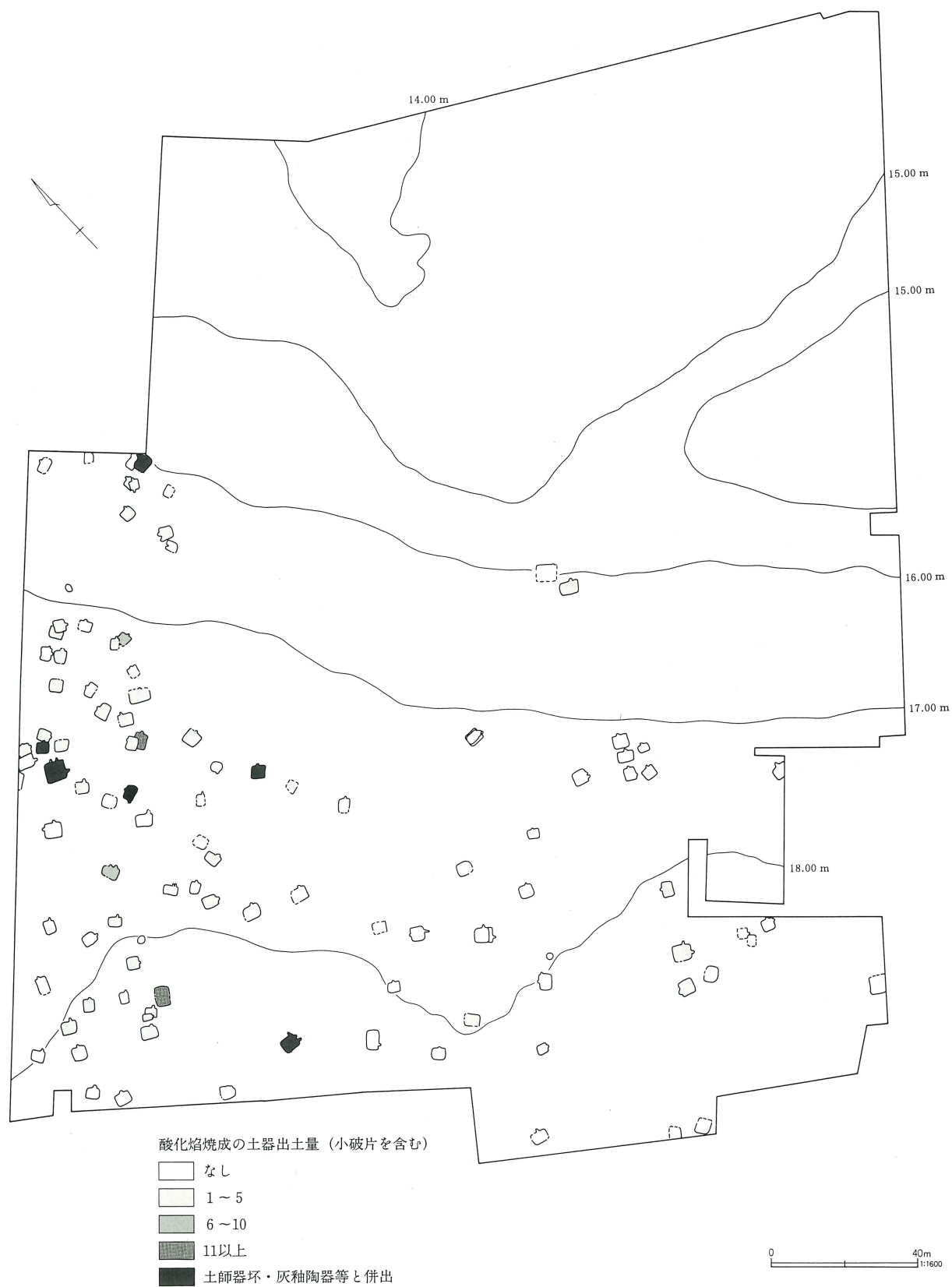
酸化焰焼成の土器集成(第490図)

1 (S J 56-3)	2 (S J 56-2)	3 (S J 60-3)	4 (S J 70-3)	5 (S J 82-2)	6 (S J 83-1)	
7 (S J 83-2)	8 (S J 91-6)	9 (S J 91-5)	10 (S J 92-5)	11 (S J 94-11)	12 (S J 94-9)	13 (S J 95-4)
14 (S J 98-2)	15 (S J 98-3)	16 (S J 102-5)	17 (S J 102-7)	18 (S J 102-6)	19 (S J 102-8)	20 (S J 111-1)
21 (S J 111-3)	22 (S J 111-2)	23 (S J 111-5)	24 (S J 111-4)	25 (S J 117-3)	26 (S J 117-4)	27 (S J 117-5)
28 (S E 121-13)	29 (G R I D-48)					

第490図 酸火焰焼成の土器集成



第491図 酸火焰焼成の土器出土量別分布図



結果的に酸化焰焼成されたものも多くみられるが、酸化焰焼成の土器には新屋敷遺跡ほどの変化はもたらされていない。

第IV期は須恵器と酸化焰焼成の土器群とは占有率が逆転し、住居によっては須恵器は完全に消滅している。酸化焰焼成の土器は第I～III期に比べると、胎土には個性があり、分析も進めば生産地の識別が可能と考えられる。また、ひとつの特徴として高台付碗などは「足高化」が進む傾向がみられる。坏では低器高化がみられ、皿状のものが出現している。椿山遺跡では明確ではないが、同様な傾向が窺われ、須恵器の酸化焰焼成と酸化焰焼成の土器が主体である。甕類は羽釜や口縁部の短いもので占められる。

第491図は、新屋敷遺跡における酸化焰焼成の土器を出土量別に色分けしたものである。出土した住居跡をみると、D区に酸化焰焼成の土器分布の中心があることがわかる。また、時期的な問題もあるが、分布の傾向として数量の少ない段階＝第I～II期は多くの住居に入るようである。これは供伴する土師器坏の量的な問題を考えると、最初の変革期がこの段階になるものと考えられる。

第490図は新屋敷遺跡から出土した酸化焰焼成の土器を集成したものである。これらの土器群には図を見る限り、須恵器に類似した形態をもっていることが窺える。特に出現期の土器は法量なども殆ど同じで、生産の前提に須恵器を意識した動きがあったものと考えられる。また、10世紀に入ると、他の土器群と同様古代後半の土器群への変貌の様子が須恵器とは好対照である。須恵器は器種や量的な減少とともに焼成や形態が次第にその姿を失っていくが、酸化焰焼成の土器は高台付碗や皿などの器種を中心に量的な増加がみられ、土器組成の変換点に当たっていることを示唆している。特に須恵器が集落内にみられなくなる10世紀後半頃になると、足高高台や坏の小皿化（本来の小皿で

はない）が進み、須恵器が行ってきた「変化していくための変化」が主力土器となった酸化焰焼成の土器群の中で行われていたことが予想される。現時点ではこうした変化が独自に行われたかあるいは別の器からの影響かは判断できないが、酸化焰焼成の土器群には、流通・生産などの時代を反映した動きを読みとることができる。

また、新屋敷遺跡からは9世紀第4四半期前後の住居跡や井戸から墨書土器が二十数点出土している。墨書いずれも須恵器にかかれたもので、文字には「十」・「土」・「上」・「日」・「甲」・「山」・「中」・「◎」・「本」などがある。「本」は則天文字とみられる。いずれも文字は一文字で、一部を除き一つの遺構に複数の墨書土器が出土する場合は、同じの文字の土器が多い。最も多いのは「十」で、以下「日」、「◎」の順である。

墨書土器は一般的に一文字のものが多く、その墨書のもつ意味については、所有者、地名(郡名)、数字などがあげられているが、実態は不透明である。しかし、墨書土器には出土の仕方には同一文字の多用、同一遺構に集中することなどが特徴としてあげられる。新屋敷遺跡の場合、墨書された土器の年代に大きな差はなく、一定の期間に集中し、器種も無台の坏に限られていることなどがあげられる。また、直接の関連性はないと思われるが、新屋敷遺跡に限ってみれば須恵器や土師器に加えて酸化焰焼成の土器の定着化など、土器群が変革していく時期にあたっており、興味深い点が多い。

以上、新屋敷遺跡における平安時代の土器群について、形態の特徴や供伴遺物との関連を概説的に述べてきた。内容に検討不足などで不十分な点が多いが、別の機会に補足していきたいと考えている。また、新屋敷遺跡では、住居内から鉄製品とともにスラグも出土し、鉄生産との関わりも指摘されている。あわせて今後の検討課題としていきたい。

第492図 墨書土器分布図

